

死に寄り添う存在

—小川洋子「最果てアーケード」—

はじめに

二〇二三年の時点で、世界人口は八〇億人を突破した。AIをはじめとして、人類は飛ぶような進歩の途中である。少し街中に行けば、ビルやコンビニの明かりは深夜まで灯り、町行く人の流れは途切れることがない。

その中に一つ、空洞ができればどうだろう。賑やかな街の通りに、ぼっかりと、薄暗くて見通しの悪い、そんな空洞だ。小川洋子「最果てアーケード」では、まさにそのような空洞とも呼べるべき場所が舞台となっている。

そこは世界一小さなアーケードで、その中にある店が扱うのは、使用済みの絵葉書や義眼やドアノブなど、誰が買うのかも分からないものばかり。物語全体を通して漂うのは、今にも消えてしまいそうな、寂寥感や孤独感といった雰囲気だ。

また、物語でしばしば描かれるのが、誰かの死である。

〈死〉が描かれるのは、「衣装係さん」「百科事典少女」「兔夫人」「紙店シスター」「ノブさん」「勲章店の未亡人」「遺髪レース」「フォークダンス発表会」の七話である。もちろんそれぞれで描かれる〈死〉はすべて同じものではない。「百科事典少女」に登場するRちゃんは内臓の病気で亡くなってしまう。「ノブさん」では、死んで剥製になったジャワマジカを主人公の私が配達するシーンがあった。また、「フ

ォークダンス発表会」では、最後まで謎に包まれていた私の父親が火事に巻き込まれて死んでしまったときのこと描かれている。

本論は、そのような物語の中で、「死」に寄り添う存在を考察しようとするものである。

一 〈死〉に寄り添う存在の考察

まず、「最果てアーケード」で扱われる〈死〉について考えよう。

「衣装係さん」では、レース屋に頻繁に訪れる老女が登場する。「私」が「衣装係さん」と呼ぶ老女は若いころ、劇場に務めて衣装を作っており、引退した後も度々レース屋でレースを購入し、家のミシンで衣装を作り続けていた。

物語の終盤で、衣装係さんは自宅で亡くなってしまう。

しかし、この時、物語中の人物の死という重い事象が、一種の非現実味を帯びていることに気づくだろう。

それは、「衣装係さん」の終盤でこう述べられていることからわかる。

ミシンにもたれて息絶えている衣装係さんを見つけたのは、いつものようにレースを配達するため研究所を訪れた時だった。まるでミシンを抱きしめているような姿だった。作業台には、針がついたままの縫いかかけの舞台衣装が取り残されていた。

その時私は、自分に課せられた一番の役割を忠実に果たした。あのスリッパをアーケードに持ち帰ったのだ。マネキンから剥がされたそれは、はっとするほどに軽く、折り畳むと、片手に納まるくらいの小さな塊になった。

死んでいる衣装係さんを発見した「私」は、泣くことも救急車を呼ぶこともせず、衣装係さんの思い出のスリッパを持って帰る。また、衣装係さんの死因やその後遺体がどうなったかのかを知らされることはない。

この淡々とした描写に、読者はギャップを感じるだろう。

では人の死が軽く扱われているのかと云うと、そういうこともない。

前述の引用は、次のように続く。

レース屋の店主は糸切りバサミで、丁寧にスリッパからレースを切り離していった。私とべべはガスストーブに当たりながら、その仕事を見ていた。店主も私も何も喋らなかつたけれど、糸切りバサミを繰る手つきから、彼が衣装係さんの死を深く悼んでいるのがわかった。

「私」が持って帰ったスリッパから、レース屋の店主はレースを切り取った。実はこのレース屋は、新品ではなく使い古したレースのみを扱っている。衣装係さんのスリッパから切り取られたレースも例外ではなく、商品の一つとして「陳列棚の片隅にそっと並べ」られる。

お葬式を上げたり涙を流したりする代わりに、「私」やレース屋の店主は衣装係さんの生きた証であるレースを介して、その死を悼むのだ。

つまり、死は淡々と描かれつつも、その重みが軽くなることはないのだ。

これがどのような効果を生んでいるか。それは、読者の目が別のものに向くことだと思われる。

前提として、アーケードの店主たちは皆一様に、自分たちの扱う商品への深い愛情を持っている。また、その商品は、かつて

誰かが使用し手放した使い古しの物が多い。

例えば「紙店シスター」では、レターセットや万年筆などの他に、使用済みの古い絵葉書も売られている。勲章店では、もちろん表彰式で授与するための勲章やメダルも扱っているが、遺族が処分に困って持ち込んだ勲章やメダルを買い取り、骨董品として売ったりもしている。

そして「紙店シスター」や勲章店が話題に上るときは、後者、つまり一度誰かが所有していたけれど手放した商品について深く描写されることが多い。

死の描写の比重をあえて小さくすることで、より一層、読者は残された遺物へ目を向けることになるのだ。

これを踏まえて、この物語で〈死〉に寄り添っているといえるものは何かと考えたとき、やはりそれはアーケードの店主たちであると思われる。

アーケードの店で売られている受取人のいないハガキも、使い古したレースも、かつて誰かに与えられた勲章も、持ち主が何らかの原因で手放さざるを得なかったものたちだ。大抵は、持ち主が亡くなっている場合が多いだろう。

本文ではそれらは、「どれもこれも窪みにはまったまま身動きが取れなくなり、じっと息を殺しているような品物たち」と表現される。

そして同時に、「しかしそれでもやはり、お客さんはやって来る。それを必要としているのが、たとえたった一人だとしても、その一人がたどり着くまで品物たちは辛抱強く待ち続ける」とも。

また、作者である小川洋子さんは、インタビューで「生きている世界」と「死んでいる世界」について言及していた。

「生きている世界」と「死んでいる世

界」があったとき、そこをスイッチが切り替わるみたいに一足飛びにパチンと移動できればいいんだけど、それができない。標本や剥製はまさにそうですけど、廃車になったバスにしても、生から死へ一足飛びに行けないで、なんの因果か途中で漂っている感じがするんです。人間であれ無機物であれ、そういうものの声を、ずっと私は書き続けてきたような気がします。

アーケードの陳列棚に並ぶ商品も、上記の例に漏れない。持ち主がいなくなり、物としての役目を完全に終えたように見える絵葉書やレースや勲章は、陳列棚に並ぶことで、再び自分を必要とする人物を待つ。

その構図は、まるで「生きている世界」、つまり物としての役目に徹する状態と、「死んでいる世界」、つまり役目を終えて後は捨てられるだけの状態の狭間を商品が漂っているように見える。

たとえ故人となっても、その人たちがかつて持っていた物を死なないようにすくい上げる店主たちは、十分〈死〉に寄り添った存在といえるだろう。

また、〈死〉に寄り添う存在は、アーケードの店主だけではない。

「百科事典少女」に登場する「Rちゃん」のお父さんも、そうであるといえる。「私」は彼のことを「紳士おじさん」と呼んだ。

そもそも「Rちゃん」とは、読書休憩室で私と一緒に本を読む仲間だ。アーケードの奥には買物物のレシートを見せることで使用できる読書休憩室があり、本棚には「私」の絵本、そして百科事典が並んでいた。

「私」が絵本を読んでいる間、「Rちゃん」は百科事典を熟読している。

「Rちゃん」の目的は、「ああ、最後の、ん、はどんなふうになってるんだろう」と

いう言葉にあるように、百科事典を一巻から最終巻まですべて読むことだった。しかし、その願いは叶わなかった。

「紳士おじさん」こと「Rちゃん」のお父さんがアーケードに姿を現したのは、Rちゃんが内臓の病気で亡くなった後だった。

「紳士おじさん」の行動は、普通感覚から考えれば実に奇妙なものだ。

彼はアーケードで物を一つ買い、レシートをもらうと、読書休憩室の「Rちゃん」が座っていた席に座り、百科事典を大学ノートに書き写していくのだ。途方もない作業だが、「私」は少し離れた中庭からそれを見守る。

次々と大学ノートが文字で埋まってくき、鉛筆は短くなってゆく。背中が痛み、ノートは汗で湿り、目はかすんでくるが、紳士おじさんは投げ出さない。理由も考えないし、むきにもならない。この世界を形作っている物事を一個一個手に取り、じっくりと眺め、感触を確かめてからまた元の場所に戻す。それを延々と繰り返す。かつて娘が検索した道をたどり、わずかな気配でも残っていないかと目を凝らし、どんなに望んでも彼女が行き着けなかった道を、身代わりとなって踏みしめる。

「紳士おじさん」はこうすることで、「Rちゃん」の死と向き合い、寄り添っていたのである。

他にも「遺髪レース」で遺髪をレースに編む「編み師さん」も、「兎夫人」で死んだラビトの義眼を作るよう義眼屋に言った「兎夫人」も、〈死〉に寄り添う存在と言えよう。

二 「ベベ」という存在

これまで作中で〈死〉に寄り添う存在について考察してきたが、物語には、特殊な立ち位置の存在もある。

この物語で、個人の名前が明かされることはない。主人公の「私」は一貫して「私」であり、ドーナツ屋の店主は「輪っか屋」。『百科事典少女』に登場する女の子も「Rちゃん」というあだ名で登場していた。そして、『兎夫人』で義眼屋に訪れる「兎夫人」の口から語られる「ラビト」という名前の兎も、終盤で実は人間の男の子であり、「ラビト」とは彼のあだ名であることが判明する。誰かの口から誰かの名前が語られることすら、一度もないのだ。

しかし、その中において唯一、名前がはっきりわかるのが、「私」の飼い犬の「ベベ」である。

作中で、「ベベ」はいつも「私」と一緒に行動していた。

「衣装係さん」では、「私」は「ベベ」と一緒にレース屋のレースを配達した。「ノブさん」でジャワマメジカの剥製を大学の研究室に届けるときも、「ベベ」は「私」についてきた。

普通、配達するだけなら「私」一人だけでもいいが、こうして「ベベ」という存在を追加するのはなぜだろう。

作者はフランスのオンブル・ブランシュ書店で開催されたイベントで、「お話の中に「沈黙」の問題がよくでてきますが、言葉を使わないで伝えるのは難しいですか？」という質問に対し、次のように答えている。

言葉で全部説明できるんだという気持ちで書いている作家は本物じゃないと思います。言葉では全部伝えきれないんだ、沈黙の中にこそ、最も伝えたいこ

とが潜んでいるのだ、ということ的前提にして、私は書いています。

「本物じゃない」と断言するほど、作者は沈黙を大切にしていた。言葉がないからこそ伝わるものがあるという作者の意見は、「最果てアーケード」でも反映されているように思われる。

ベベについて、「衣装係さん」で次のような記述がある。

「あらっ。あそこに犬が」

今ようやく気づいたかのように、彼女はベベを指さした。ベベはうつぶき、何事かを思案する様子で、植木鉢の間をくくんかぎ回っていた。

「私の犬です」

「犬にしては、随分、大人しいじゃない」

「はい。人見知り犬なんです」

衣装係さんには目も向けなまま、相変わらずベベは植木鉢の点検にいそしんでいた。

つまり、ベベは「沈黙」の象徴でもあるのだ。アーケードの商品も「沈黙」している無機物であるように、「最果てアーケード」における「沈黙」は重要な役割を持つ。また、ベベは「沈黙」の象徴であると同時に、犬という動物でもある。

動物の立ち位置について、作者は次のように述べている。

私がいつも小説のなかで動物を取り上げるのは、やはり彼らが言葉をもっていないということですね。(中略)

本当に大事なことは言葉にできないんだということを知っていたのは動物の方じゃないかなというふうに思います。ですから小説のなかにポツンと言葉を

喋らない存在を持つてくると、ダイナミックにお話が動き出します。

つまり、ベベは「ダイナミックにお話を動き出」させることのできる、非常に重要な存在なのだ。

本文中でも、ベベは他の登場人物よりも一歩立ち入ったところまで踏み込むことができる。

「百科事典少女」には、次のような記述が見られる。

ベベはRちゃんの足の間に体を納め、お腹を全部床につけ、気持ちよさそうに目を閉じているが、耳だけはりりしく立てている。

ホットレモネードを一杯注いだあと、私は紳士おじさんの邪魔にならないよう、中庭から読書休憩室を見つめた。ただベベだけは違った。ベベはどんなに近くにいても、何の差し障りにもならなかった。Rちゃんの時と同じようにベベは、おじさんの足元に寝そべり、時々尻尾で床を掃きながら、鉛筆の音に耳を澄ませていた。

「兎夫人」や「輪っか屋」でも、ベベは「私」と同じくらい、主要な登場人物と触れ合っている。読んでいるうちに、まるでベベが人々を見守っているかのような印象を抱くだろう。

「最果てアーケード」で登場する人物が様々な形で〈死〉に寄り添う存在だとしたら、ベベはそれをも包括し、寄り添うストーリーテラーのような存在ではないか。

補足となるが、作者の犬に対する特別な思い入れについても、雑誌『BRUTUS』のインタビューから引用しておく。なお、「ラブ」とは、かつて作者が飼っていた犬の名前である。

言葉が通じないものと心を通わせる、ということをラブから教わりました。小説は言葉で成り立っていますが、実は言葉では通じないもののほうが大切で、それを人は言葉で表現しようとしている。私が数字やチェスなどの、言葉を使わないコミュニケーションに惹かれていくきっかけは、犬だったと断言できますね。

「ベベ」という存在の大切な役割も、こうして裏打ちされるのである。

おわりに

以上で述べてきた〈死〉に寄り添う存在は、いずれも多様な方法で〈死〉に寄り添おうとしていた。

前述したように、物語全体を通して漂うのは、今にも消えてしまいそうな、寂寥感や孤独感といった雰囲気だ。

しかし、この物語で描かれるのは、廃れゆくものの末路ではない。むしろ、社会からこぼれ落ちたそれらを丁寧にすくい上げ、売り物、つまり誰かの手に渡るものとして再び店頭に陳列する、アーケードの店主たちの姿だ。それに加えて、亡くなった身近な人を自分なりの方法で悼もうとする「紳士おじさん」や「兎夫人」、そして「私」の姿だ。そんな人々の姿が、「私」と「ベベ」を通して描かれているのが、この「最果てアーケード」なのである。

参考文献

『小川洋子のつくり方』 田畑書店編集
部編 田畑書店 二〇二一年

インタビュー記事 「犬と生き、犬を書き、犬を読む。作家・小川洋子の「犬と文学」

(https://brutus.jp/dog_read_ogawa/)

*小川洋子『最果てアーケード』は、講談社文庫 二〇一五年によった。